

ギャラリートーク要旨

H.S.フォックスウェル文書と日本



経済学部教授 井上 琢智

ご紹介いただいた井上です。今回のテーマと私のこれまでの研究との関わりからお話したいと思います。私はこれまで近代経済学の歴史を勉強してきました。大学院時代から学んできたのは W.S. ジェヴォンズというユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンで教員をしていた経済学者です。研究の過程で、そのジェヴォンズのところで日本人の留学生が7人学んでいたとの情報を、当時名古屋大学におられた水田洋先生からお聞きし、ジェヴォンズと日本人留学生との関係を調べ始めました。

今日お話しします「フォックスウェル文書」のフォックスウェルは、このジェヴォンズと非常に親しくなり、ジェヴォンズの死後、彼の論文や草稿の編集・出版をその夫人から引き受けました。1冊は完成させましたが、もう1冊は他の人が出版することになりました。このような両者の付き合いの中で、フォックスウェルはジェヴォンズから書籍だけでなく、多くの書誌情報—その中には書簡も含まれていますが—を蒐集する「病氣」をうつされました。蒐集した書籍は、現在では「ゴルドスミス・クレスライブラリー」として、経済思想史研究にとってきわめて有用なものとなり、多くの研究者が今日でも利用しています。他方、フォックスウェルが生前に受取った書簡等は、関西学院創立 125 周年記念事業の一環として購入され、「フォックスウェル文書」と命名されています。この写真がその束です (写真 1)。

この「文書」は全部で約 24,000 点を超える書簡等から成り立っています。点数については、数え方によって異なるとは思いますが、現在までの整理で、約 24,000 点としています。もちろん、これらの書簡等が全部整理された段階で、より正確な点数をお示しできと思っています。今日は、私



写真 1：フォックスウェル文書

が関心を抱いているテーマに従って、日本人・W.S. ジェヴォンズ夫人・弟の E. フォックスウェルからのフォックスウェル宛書簡のうち、13 通を紹介したいと思います。

最初に、フォックスウェルの経歴を簡単に紹介したいと思います。

1. H.S. フォックスウェル (Herbert Somerton Foxwell, 1849-1936) の略歴

H.S. フォックスウェル (写真 2) の略歴については、今日の話に関係ある点を中心に紹介したいと思います。フォックスウェルは、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンで学び—ジェヴォンズがこのカレッジの教授になるのは後のことですが—1867 年に学士号を取得します。この時期、日本人留学生がこのユニヴァーシティ・カレッジで学んでいます。ご承知のように、長州が 1863 年、薩摩が 65 年に、幕府が 66 年に、70 年には土佐がイギリスに留学生を送っています。このことから考えると、フォックスウェルは 1867 年



写真2：H.S. フォックスウェル

写真3：弟 アーネスト・フォックスウェル

から68年の1年間在籍していますので、その間に日本人と接した可能性は十分あります。残念ながら証拠はありませんが、このユニヴァーシティ・カレッジは当時それほど大きな学校ではありませんので、そのように考えても問題ないと思います。留学生の中には、ジェヴォンズの講義に出席し、その受講ノートを残した山辺丈夫－後に東洋紡の初代社長に就任する人物ですが－のような人もいます。

ユニヴァーシティ・カレッジを卒業したフォックスウェルは、ケンブリッジ大学のセント・ジョーンズ・カレッジに入学しています。そこでアルフレッド・マーシャルから経済学を学び、経済学者になります。マーシャルは、現代経済学の基礎を作った有名な経済学者です。「フォックスウェル文書」に16通もの書簡を残している添田壽一も彼のもとで経済学を学びます。

弟のアーネスト(写真3)もまた、最初は医者になるつもりでしたが、セント・ジョーンズ・カレッジに入学し、経済学者への道を歩み始めています。アーネストは後に東京大学の教師となっています。東京大学は、ご承知のように、当時、ドイツの経済学者をお雇い外国人教師として雇用していますが、その中にあって、例外的にアーネストが帝国大学－のちに東京帝国大学－の教師を1896年から99年の3年間勤めています。さらにアーネストは、一橋大学の前身である高等商業学校で非常勤講師を務めていますが、それを示す高等商業学校校長から帝国大学総長への依頼状が残されています。このように二人の兄弟は深く日本と関わ

りを持つようになっていきます。

これらの事実を明らかにする書簡類を今回13通紹介したいと思います。もちろんこれらはすべて「フォックスウェル文書」に含まれていますし、後に指摘しますが、1通を除いて初めて紹介される書簡です。

2. 発見者フリーマンについて

これは、知人のリン・E・リッグスさんが、この夏にケンブリッジ大学に行かれたときに撮影したフォックスウェルの住居の写真です(写真4)。ここに「フォックスウェル文書」が残されていました。



写真4：フォックスウェル住居

ここでこの文書を発見したのが、オーストラリアのR.D.フリーマンでした。実は1970年代から、フォックスウェルがたくさんの書簡を残していたことは知られていましたが、どこに残されているかは不明でした。例えば、ジェヴォンズの研究家であるR.D.C.ブラック先生らが探されましたが、なかなか発見できませんでした。フリーマンがフォックスウェルの娘さんと知り合い、自宅から－例えば、風呂場にも放置されていたようですが－先ほどお見せした書簡の束が出てきたとのことです。もちろん、家にはこれら書簡などの他、当然、本や家具などもあったのですが、それらの整理を手伝ったのがフリーマンで、その仕事のお礼としてフリーマンはこれら書簡を受け取ったということです。その書簡を含

む資料をフリーマンが整理し、その内容のメモなどを作成しました。その結果、現時点では約 24,000 点の書簡等があることがわかった訳です。

3. 「フォックスウェル文書」の資料的価値

13 通の書簡を紹介する前に、「フォックスウェル文書」の資料的価値について少し触れたいと思います。この文書は、マーシャルの弟子であるフォックスウェルが、マーシャルを中心とするケンブリッジ大学の知的環境からどのような影響を受け、また、逆に他の人びとにどのような影響を与えたかといったフォックスウェル自身の知性史・伝記的研究にも役立ちますし、その研究の中で、彼の思想や経済学そのものの形成史を跡付けることにも役立つと思います。さらに、そのグループに属する人びとと多数の書簡をやりとりしていますので、それらの人びとが属するヴィクトリア時代の知的階級の生活史の研究に、さらに家族間の書簡も多く残されていますので、家族史の研究、とりわけフォックスウェル家の研究に役立つだろうと思っています。加えて、当時展開されつつあった近代経済学の普及・定着の研究、フォックスウェル自身がケンブリッジ大学の中で近代経済学と歴史学派や社会政策学会との論争とどのように関わったか、といった経済思想史研究にも役立つだろうと思います。ひいては、「経済学の制度化」といった視点からの研究に大いに役に立つだろうと思っています。その他にも、ヴィクトリア時代の政治史研究—というのは当時の政治家やその卵との書簡が多く残されていますので—にも大いに役立つであろうと思っています。

4. 「フォックスウェル文書」における日本人書簡

19 世紀の後半から 20 世紀の前半の日本の政治史、経済史、思想史を含む学際的な研究を、この「フォックスウェル文書」が促進するのではないかと紹介したいと思います。

現時点でフォックスウェル宛書簡を書いた日本人は、40 数

人だろうと思いますが、書簡に書かれた手書きのアルファベットから日本人を特定化するのは、作業としては簡単なかようなかなか難しいところがあります。去年の秋の大学図書館の講演会—その講演会で配布した資料が「フォックスウェル文書に見る世界的な知の交流」ですが—でお話したときに、S.Watanabe を誤ってジェヴォンズの *Political Economy* (1878,1881) を『日奔氏経済初学』(1884) として邦訳・出版した渡辺修次郎と紹介しましたが、今回紹介する書簡の調査の過程で、正しくは当時三井物産ロンドン支店長であった渡辺専次郎であったことが明らかになりました。

また、今日紹介する書簡に登場する日本人に、T.Masuda という人物が登場しますが、これは益田孝のことで、当時、三井物産社長(初代)だと分かりました。彼は商法講習所、その後、東京商業学校、高等商業学校となり、最終的には一橋大学となる学校の商議委員であり、この学校の経営に深く関わった人物です。

さらに Baron Sakatani という人物が出てます。この人物は、添田壽一とともに東京大学を卒業した阪谷芳郎のことです。彼らはフェノロサから経済学を学び、大蔵省の役人で東京大学の講師をも兼任していたイエール大学出身の田尻稲次郎の勧めで大蔵省に入り、その後、阪谷は大蔵大臣になります。

ところで、この「文書」に含まれる日本人からの書簡で一番多いのが添田壽一のもので、全部で 16 通あります。なぜ添田の手紙がこれだけ多いかということを後に申し上げたいと思います。その前に今回展示しました書簡のうち、最初の 3 通を書いた末松謙澄を紹介したいと思います。

それから、フリーマンのことは先ほど少し触れましたが、彼はメルボルン大学で、G. タッカーのもとで経済思想史を学び、研究者の道を歩みましたが、途中で官界に転じました。彼は H. シジウィックの研究家ですが、その研究途上で「フォックスウェル文書」に関心を抱きました。というのは、フォックスウェルと H. シジウィックの関係を明らかにす

る資料がこの「フォックスウェル文書」にあるのではないかと考え調査をして、すでにお話ししたようにこの資料を発見した訳です。シジウィックのフォックスウェル宛て書簡は46通含まれていますが、このシジウィックに係わる書簡も紹介したいと思います。

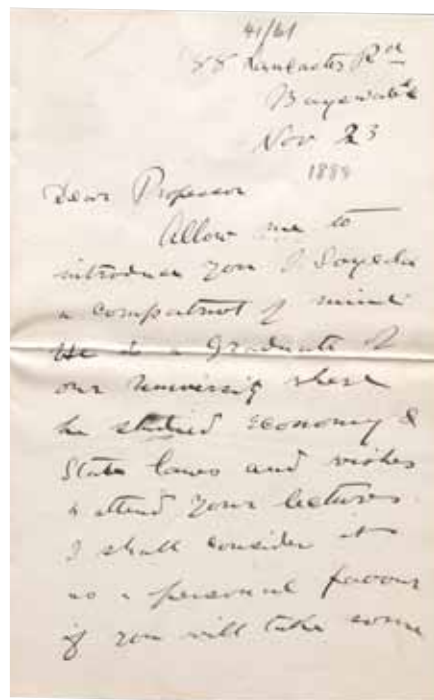
5. 展示書簡から何が読み取れるか

1) 日本人留学生のケンブリッジ大学入学

：末松謙澄と添田壽一

末松謙澄がどのような人物であるかご存じでしょうか。この人物は、二・二六事件で殺害されたあの「だるま」こと高橋是清から英語を学びますが、非常に語学がよくできた人物で、伊藤博文の支援を受けて官界に入り、イギリス駐在公使館の一等書記生見習いとして渡英し、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン、さらにはケンブリッジ大学のセント・ジョーンズ・カレッジに留学することになります。留学してすぐに、『源氏物語』を、部分訳ですが英訳したり、源義経が日本で死んだのではなく、蒙古へ逃れ、チンギス・ハーンになったという話を英文の著書で紹介した人物です。この話は後に大問題になります。というのは、日清戦争後の「黄禍論」誕生の一つの芽となっていきます。日本人も中国人も、白人ではなく、黒人でもなく、黄色人種であり、その黄色人種が世界を席卷するのではないかとこれが黄禍論ですが、欧米を震撼させるようになりました。この「黄禍論」を沈静化させるために、日露戦争時には末松はイギリスに派遣されますが、アメリカに派遣されたのはハーバード大学出身の金子堅太郎なのですがそれは、高橋是清のイギリス・アメリカでの外債発行の手助けをするためでもありました。さらに、日本のロシアへの宣戦布告によって始まった日露戦争は「日本の防衛」のために過ぎないと日露戦争を正当化し、日本の勝利によって、アジアの平和、アジアの門戸開放に役立つと、欧米人を説得して回りました。

今回展示しています Letter 1 は、この末松からフォックスウェルに出された書簡です。今回紹介する英文書簡の全



Letter 1 : 1884 年 11 月 23 日付末松書簡

文翻刻版は、注を付して関西学院大学経済学部『経済学論究』に近々紹介したいと思っています。

この書簡には次のようなことが書かれています。添田壽一は東京大学を卒業し大蔵省に入ったものの、すぐに非職となり、渡英してケンブリッジ大学で経済学を中心に学びたいと考えました。しかし、自分がつきたいと思っていたケンブリッジ大学の経済学教授 H.フォーセットが死去したことを知り、末松を通じて、フォックスウェルに自分の「コーチ」になってもらえないかを問い合わせています。というのは、添田はすでに東京大学を卒業し、学士の学位を取得していましたので、正規の学生になる必要はなく、本格的な経済学研究だけを志してのことでした。

ケンブリッジ大学では、フォーセットの死後、その後任にマーシャルが就任することになりました。というのは、結婚すると教授を務められないというルールのため、一時ケンブリッジ大学を離れざるを得なかったマーシャルですが、その後のルールの変更によって、フォーセットの後任として経済学教授になることができたのです。ですから、末松は、フォックスウェルには、添田の臨時的で、しかし定期的な、

私的なチューター―当時、この仕事はケンブリッジ大学では「コーチ」と呼ばれていました―を依頼したのですが、添田が正式な指導教授として本格的に経済学を学ぶようになったのはマーシャルでした。この書簡は添田がケンブリッジ大学で経済学を学ぶきっかけを末松が作ったことを示すものです。

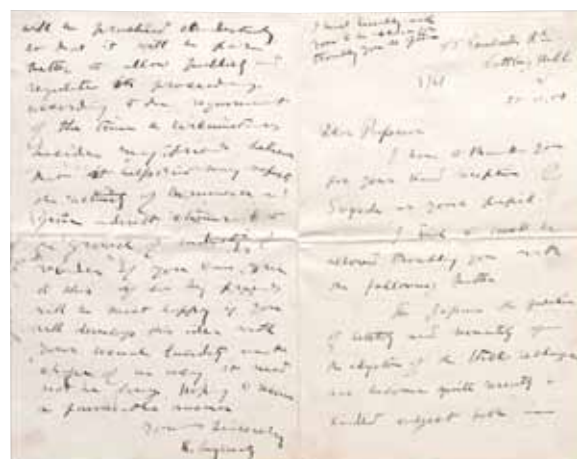
ところで、末松とフォックスウェルはどこで知り合ったかということが問題になりますが、それを示す直接の資料は今のところ見つかっていません。ただ、末松はケンブリッジ大学の学生になる前に、当時の日本人留学生と同様、まずはユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンで学んでいます。この点は、これまでの末松研究では知られていませんでしたが、今では、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンの学籍名簿で確認できています。

それではなぜ、当時の日本人留学生がこのユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンで学ぶようになったのが問題になります。このカレッジは創立当初から中産階級のためのカレッジで、入寮して学ぶという古典的なオックスブリッジとは異なるカレッジでしたので、日本人は非常に留学しやすかったからです。また、オックスブリッジは当時イギリス国教会の大学でしたので、国教会の信者でないと入学できないという制約がありました。そのために日本人は、正式な学生にはなれませんでした。もっともその制約は少しずつ緩められて、末松が入学した時代にはなくなっていました。ケンブリッジ大学に最初に入学したのは、後に東京帝国大学教授、総長になった菊池大麓でした。1873年の入学です。

さらに日本人が入学できなかった理由の一つに、ギリシャ語、ラテン語が入学試験にあったこともあげられます。それも次第に緩められ、漢文でも試験が受けられるようになり、日本人も入学しやすくなっていきました。このようにオックスブリッジにも日本人が留学していきます。それでも、オックスブリッジに入学する前段階として、日本人留学生の多くはユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンやキングス・カレッジ・

ロンドンに入学しました。末松謙澄もその一例です。末松はこのカレッジでフォックスウェルに出会った可能性があります。正式に彼がこのカレッジの経済学教授になったのは、末松がこのカレッジを離れた1880年の翌年ですが、さらに、ケンブリッジ大学に末松が入学したのは1880年ですが、そのとき、フォックスウェルはフェローを務めていたので、ケンブリッジ大学とりわけセント・ジョーンズ・カレッジで会った可能性があります。ただ、どちらであるかの決定は今のところできません。

次に、Letter 2を紹介したいと思います。



Letter 2 : 1884年11月25日付末松書簡

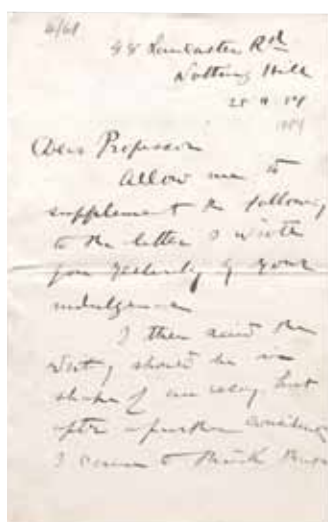
この書簡も末松によるものです。フォックスウェルが添田を「生徒」として受け入れてくれることに感謝をする書簡です。この書簡には重要なことが、今回の講演会での直接のテーマではありませんが、追伸に書かれています。当時、日本でも株式の取引条例ができ、取引所が設立されたのですが、末松は株の売買が低調なことを心配して、この状況を改善するために何をなすべきかを教えてほしいと、フォックスウェルに問い合わせています。末松は株式の売買が日本経済の進展に大きく寄与すると考えてのことでした。

この問題に関する書簡は、「フォックスウェル文書」に、この書簡を含めて全部で7通含まれています。それらの書簡では、他のことも書かれていますが、ほとんどが取引所関連の書簡であり、日本経済の活性化のためのアドバイス

を求めている書簡です。ただ、残念なことに、フォックスウェルからの書簡が残っていませんので、どのようなアドバイスであったかわかりません。その点では書簡による研究は、やはり往復書簡として揃えられて初めて、明確な内容・ストーリーがわかります。今回のように片一方の書簡だけで、全体像がなかなかわかりにくいことはあります。

このような問題があるにせよ、当時の日本での経済問題が何であったかを示す資料として、これらの書簡は重要ではないかと思います。とくに経済史を研究される方には重要で、このような株式取引所、米相場の取引所とか、いわゆる資本主義化するときの制度設計に対するアドバイスを末松はフォックスウェルに求めていることになります。

Letter 3 を紹介したいと思います。



Letter 3 : 1884 年 11 月 28 日付末松書簡

この書簡も末松のフォックスウェル宛の手紙です。末松はフォックスウェルを株式取引所の問題の権威であると考え、アドバイスをぜひ欲しいと申し出ました。当初、正式な論文を書いてほしいと考えていたようですが、それが難しいのであれば、短くてもいいから、とにかく何かのアドバイスを下さいと要請しています。制度ができたけれども、それが機能しないことを懸念してのことです。確かに当時の株のほとんどがいわゆる明治政府の公債で、取引所ではその売買程度しかやっていませんでした。その後、鉄道株

が売買されるようになりましたが、それだけでは日本の経済発展にとっては十分ではなかったと考えてのことでした。

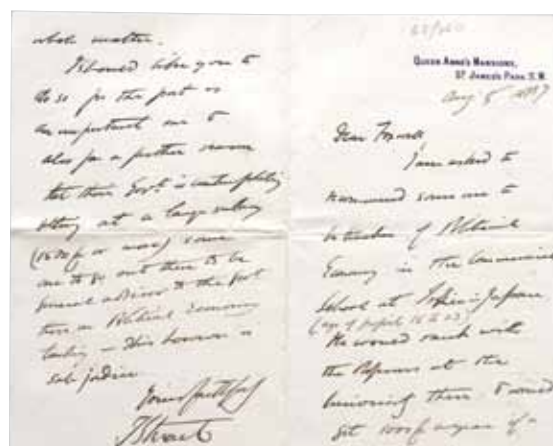
このようにフォックスウェル宛の末松の書簡は、添田壽一をフォックスウェルに紹介するものでしたが、末松に代わって日本人をイギリスに、ケンブリッジに紹介する役目を果たしたのが添田です。この点について、後に触れたいと思います。

添田はこれまでの研究でも明らかになっていますが、非常にマーシャルの信頼を得ました。例えば、イギリスの経済学会の学会誌である『エコノミック・ジャーナル』誌の日本通信員を引き受けました。同誌に投稿し掲載された添田の公開書簡等は全部で 19 通あります。このように同誌上で活躍したこともあり、添田が亡くなった際、その追悼文は J.M. ケインズによって書かれました。このようにケンブリッジ大学だけではなく、イギリスの経済学界でも添田は非常に高く評価されました。

2) お雇い外国人の紹介と雇用

：東京大学・東京商業学校・経済顧問

東京大学や東京商業学校さらには政府の経済顧問の雇用交渉の過程を明らかにする資料が、Letter 4 から Letter 10 までです。この中で、Letter 5 は、既に公開されています。Letter 4 に登場するジェームス・ステュアートは、マーシャルの学生であり、教育者としてケンブリッジ大学の



Letter 4 : 1887 年 8 月 5 日付 J.Stuart 書簡

生涯学習の発展に力を尽くした人物です。ステュアートにお雇い外国人を紹介するように依頼した人物が誰であったか現時点では不明ですが、Letter 4 は、ステュアートがフォックスウェルに東京商業学校の経済学教員と政府の経済顧問の推薦を依頼する書簡です。

この書簡によれば、生徒、つまり東京商業学校の生徒の年齢は 16 歳から 23 歳までで、帝国大学教授と同じ待遇—実際には、専門学校と大学とは社会的地位が違いますが—だと書いています。また、年収は 1,000 ポンドです。その当時の為替から言うと、日本円で 5,000 円になりますので、相当高い給料ですね。少し調べてみますと、内閣総理大臣の当時の年俸が 9,600 円ですから、この 5,000 円の給料は破格ですね。

当時お雇い外国人を余りにもたくさん雇いすぎたために、明治政府の財政は厳しい状況でした。というのは、日本紙幣では賃金の支払いができません。金貨や銀貨で支払わなければなりませんので、大量の金銀が日本から流出することになり、文部省予算、国家予算を圧迫していた訳です。加えて、日本人留学生の経費も財政を圧迫していました。当初、各省が留学生を派遣していましたので、留学生を統括する省庁が必要だということとなり、文部省がその窓口となり、各省は勝手に留学生を派遣できないようにしました。加えて、当初、各藩の大名もその子どもを海外に派遣していました。それも家来を連れて行きますので、相当の金銀が流出します。このように多くの日本人が留学生として海外に出ますが、留学生の中には当初の目的を達成できず、病気になったりする人も出て来ます。まったく英語もわからない、生活習慣も異なる日本人が何ら準備することなく、留学するので当然だと思います。

例えば、馬場辰猪は土佐から派遣されますが、彼は非常に英語もよくできましたので、留学してまもない頃に日本語の教科書・文法書を英語で書いて出版します。1873 年のことです。このような人物は例外中の例外で、ノイローゼや病気になり、勉強どころではなくなります。場合によって

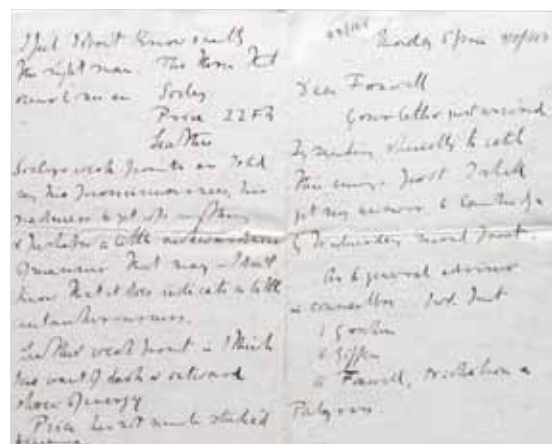
は留学先で亡くなったり、行方不明になったりします。留学の成果をあげ、帰国後、日本の近代化に何らかの形で貢献した人は、全体の 3 分の 1 以下だったろうと思います。

これらの事情から、先に触れましたように、文部省に留学生派遣の窓口が一本化されて以降、主として東京大学・帝国大学出身の卒業生を中心に、選りすぐられた留学生が派遣されます。第 1 回の文部省派遣留学生は、鳩山（三浦）和夫、小村壽太郎ら 11 名でした。彼らは帰国後、官吏や教員等になります。というのは、彼らは、在学中にお雇い外国人教師から英語で教育を受けていましたので、留学しても十分成果をあげることができたということです。

このように東京大学での授業は、当初英語で行われたのですが、次第にドイツ語が重視されていきます。さらにこれら留学生は帰国し、教授に就任すると、日本語で授業するようになっていきます。逆に、1896 年に帝国大学の教師となったラフカディオ・ハーンは、学生の英語能力の貧弱さに落胆するようになるのですが。

このようなジェームス・ステュアートと同様の問い合わせが、直接・間接に恐らくマーシャルにもあったのだと思います。それを示すのが Letter 5 です。

この書簡は、アルフレッド・マーシャルからフォックスウェル宛で、非常に興味深いものです。ただ、この書簡は既に Whitaker, J.K. *The Correspondence of Alfred Marshall, Economist* (1996) の中で紹介されていますので、一部の



Letter 5 : 1887 年 8 月 9 日付 A.Marshall 書簡

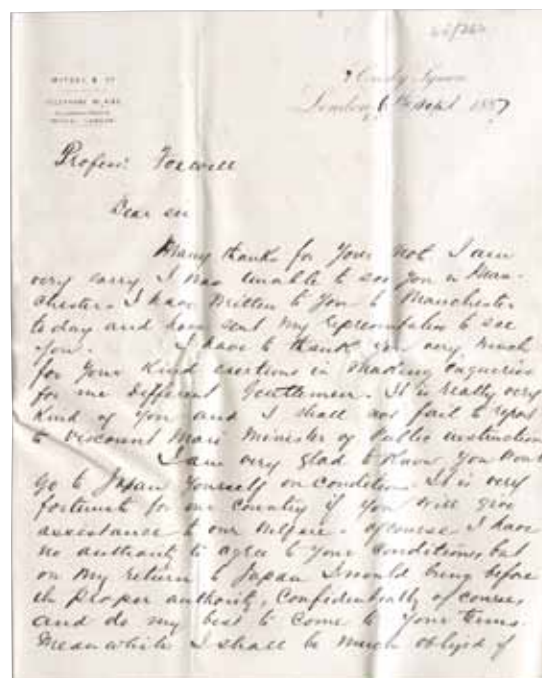
方はもちろんご存知です。この書簡の中で、マーシャルはフォックスウェルに、具体的な名前を挙げて政府の経済顧問と帝国大学の教師を推薦しています。

まず、政府の経済顧問として、政治家の G.J. ゴーシェン、ジャーナリストの R. ギッフェン、それからフォックスウェルなどです。ただ、このフォックスウェルが兄のフォックスウェルか弟のフォックスウェルなのかが問題になります。この書簡は兄のフォックスウェル宛の書簡ですので、一般的には書簡の相手である兄のフォックスウェルではないと思われます。というのは、書簡の相手である兄のフォックスウェルのことであれば、書簡の中で、“you”と書くと思われるからです。それをわざわざ「フォックスウェル」と書いていますので、弟の「アーネスト・フォックスウェル」を指しているとも考えられます。1890 年代後半になってのようですが、実際に弟が帝国大学の教授になって来日します。ただ、兄のフォックスウェルの可能性もない訳ではありません。というのは、彼はケンブリッジ大学教授になれませんでしたし、日本に行ってもいいという気持ちがあった可能性もあり、そのことを知っていたマーシャルが、「あなたがいい」という意味で、ただ単に “you” と書かずに「フォックスウェル」と書いたのかもしれません。どちらであるかを断定するのは今のところ困難のように思われます。しかし、とにかくフォックスウェルが推薦されています。それから政治学者の J.S. ニコルソンや銀行家の R.H. パルグレイブが推薦されています。

帝国大学の教師としては、マーシャルのオックスフォード時代の教え子で経済学者である L.L.F. プライスや哲学者の W.R. ソーリなどが推薦されています。この書簡で重要なことは、添田壽一が帝国大学の教師としてもっとも相応しいとして推薦されていることです。マーシャルがいかに添田壽一を帝国大学教授としても十分やっていいかと思っていたかがよくわかります。添田壽一は、残念ながらずっと大蔵省や日本興業銀行総裁など「官僚エコノミスト」として活躍します。もっとも、彼は、東京帝国大学、東京専門学校、専修学校、学習院などで経済学を講じ、日本法律学校の

創立にも参加しました。

Letter 6 は、益田孝の書簡です。



Letter 6 : 1887 年 9 月 6 日付益田書簡

ご承知のように、三井物産の立ち上げに際し、その運営を三井家から頼まれた益田は、高橋是清も学んでいたヘボン塾でも英語を学び、英語はかなり自由に使えた人です。このような人が東京商業学校の教員と政府の経済顧問の雇用の仲介者になったことは適任であったと思います。

フォックスウェル自身の来日の可能性を知った益田は、この書簡でそれを喜び、彼の来日のための雇用条件についてフォックスウェルに打診しています。おそらくフォックスウェルが条件次第では来日してもいいと益田に伝えたのではないかと思います。もっとも、益田は交渉は自分がするが、最終決定は文部大臣である森有礼だと責任の所在を明確に指摘しています。この書簡の中で、益田はフォックスウェルだけでなく、カニングムにも言及しています。このカニングムは、おそらく歴史学派の W. カニングムだろうと思います。というのは、この書簡の中で、東京商業学校の経済史の授業を担当してほしいとの希望を示していますので。

益田は、さまざまな苦労を経て後、井上馨の知遇を得て

大蔵省に入省します。井上が大蔵省を辞したときに、自らも辞任し、井上と共に商社を立ち上げましたが、井上が官吏に復帰した際に、その商社を解散しました。そして後に三井物産を立ち上げることになりました。

ご承知のように、この商法講習所そのものは森有礼が私学として創立したもので、アメリカ滞在中に知り合った W.C. ホイットニーを招聘します。ただ、校長矢野二郎とうまくいかず、矢野に解雇されます。益田は矢野の義弟であり、渋沢栄一とともに商法講習所（後の東京商業学校、高等商業学校）の運営に商議委員として参加していました。その立場から、同学校のお雇い外国人や政府の経済顧問の雇用に参加していました。

Letter 7 を簡単に紹介したいと思います。



Letter 7 : 1887 年 9 月 6 日付益田書簡

この書簡は“MITSUI & CO. 1, CROSBY SQUARE, LONDON”と会社名が入っている封筒に同封されています。三井物産にはロンドン支店があり、その支店を通じて貿易をしていました。この書簡に書かれた益田のサインもなかなか手慣れたものですね。益田の英語の上手、下手を私は判断できませんが、それなりの英語だろうと思います。

益田は、1887 年 3 月 4 日から仕事のためにヨーロッパに行きます。益田自身が社長を務める三井物産のロンドン支店の支配人が渡辺専次郎です。商法講習所出身の渡辺は、矢野の推薦で三井物産に就職しました。この時期、彼はマ

ンチェスターに滞在していました。というのは、三井物産は日本の米を輸出するため、交渉をその地でしていたのだと思います。米は食料品ではなく、繊維を織る際に繊維を柔らかくするためのもので、米粉にして使ったようです。つまり、米は工業原料だったということです。

この年の 8 月、マンチェスターでイギリス科学促進協会の全国大会が開かれています。現在でもこのイギリス科学促進協会は存続しており、自然科学や経済学など諸科学の普及を目的とする組織です。その F 部会が統計学と経済学で、この学会にフォックスウェルも出席する予定であったと思われます。ただ、何らかの理由で益田がマンチェスターに出かけることができなくなり、会えなかったことを詫げる書簡です。もともとこれを書簡と申しましたが、実際には封筒には切手が貼られておらず、消印等もありません。恐らく益田がこれを書いて渡辺に手渡し、それをフォックスウェルに持参させたのではないかと考えています。

3) 紹介者としての添田壽一

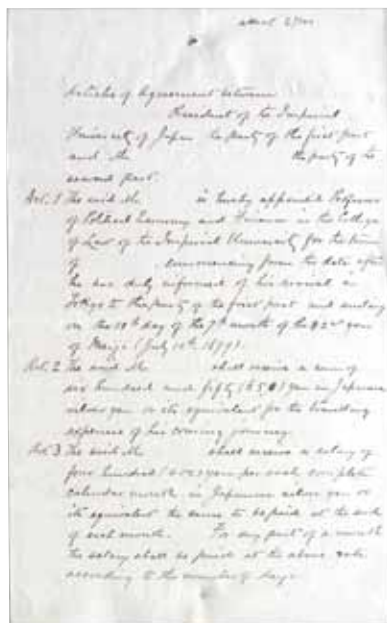
この Letter 8 が添田壽一のフォックスウェル宛の書簡です。

この書簡が投函された 1895 年には、帝国大学（東京大学）のお雇い外国人教師の雇用が問題になります。簡単に申しますと、東京大学では、最初、アメリカ人の E. F. フェノロサが経済学を教えています。その後、ドイツ人の K. ラートゲンや U. エゲルト、さらに A. von ウェンクステルンが雇用されています。このことからお分りのように、ドイツ人により主としてドイツ歴史学派の経済学・財政学が教えられています。いわゆる学問のドイツ化です。このような時代にあつて、イギリス人であるフォックスウェルに声がかかりました。この書簡はお雇い外国人の経済学・財政学教師を雇用する条件を提示する書簡ですが、時期的に見て、弟のアーネストの雇用に関する書簡だと思われます。

この中で注目していただきたいのは雇用契約書のひな形です。ひな形と言いましたのは、お雇い外国人の雇用については、原則、このひな形によって契約されていることが



Letter 8 : 1895 年 6 月 19 日付添田書簡



Letter 9 : 1896 年 3 月 20 日付添田書簡

分かります。と言いますのは、他のお雇い外国人の雇用契約書と比較してみますと、ほとんど同じ文章から成り立っているからです。もちろん、給与などの項目の内容は異なりますが。

例えば、東京大学における初期のお雇い外国人教師で、あの大森貝塚の発見者である E.S. モースの契約書が残されていますが、その契約書とこの書簡に含まれた契約書とはその形式等はほとんど同じです。モース自身は貝の研究のために自費で来日しましたが、東京大学教師になります。モース自身は進化論者でした。当時、東京大学でもキリスト教排斥運動が起こっており、モースは進化論によるキリスト教排斥の道具として利用されたことになります。外国の知人宛の書簡紙の中で、新島襄は東京大学は反キリストの牙城になっているとして批判をしています。このような時代にモースが来日したのです。そのモースがフェノロサを東京大学の教師として推薦しました。

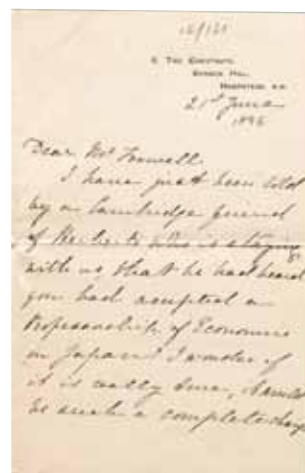
Letter 9 は、添田が大蔵大臣秘書官である早川千吉郎をフォックスウェルに紹介する書簡です。

注目したいのは、その追伸の中で来日したばかりのアーネスト・フォックスウェルに「近いうちに会いに行くつもりで

ある」と兄のフォックスウェルを気遣っているところです。

Letter 10 は亡きジェヴォンズの夫人からの書簡です。

ジェヴォンズの息子は当時ケンブリッジ大学で経済学を学んでおり、のちに経済学者になります。その息子から夫人は「フォックスウェル先生が日本に行くらしい」との噂を聞いたようで、彼女は「まだ編集・出版ができてない1冊の本を編集・出版してから日本に行ってほしい」との思いから書いた書簡です。もっとも、来日したのは、兄のフォックスウェルではなく、弟のフォックスウェルでしたから、誤解にもとづく怒りの書簡です。



Letter 10 : 1896 年 6 月 21 日付 H.A.Jevons 書簡



Letter 11 : 1908 年 3 月 1 日付添田書簡

次に Letter 11 の添田書簡を紹介したいと思います。

この書簡は、添田壽一の東京大学時代の同級生で渋沢栄一の娘婿であった前大蔵大臣阪谷芳郎を、フォックスウェルに紹介するものです。阪谷は岡山出身で、最初、箕作秋坪の三叉学舎で学びます。この学校で学んだ人には、慶應義塾の塾長となった鎌田栄吉がいます。阪谷はその後、東京英語学校に入学しました。この学校の同窓には、後に帝国大学教授になった金井延^{ノブル}や添田壽一もいます。さらに、穂積八束や進化論の石川千代松、早稻田の教授となった高田早苗らもいます。

1880 年、阪谷は東京大学文学部に入学しましたが、卒業後、添田とともに大蔵省に入省します。彼自身はその後大蔵大臣になりました。この書簡は、大蔵大臣を辞めた後イギリスを訪問するに際して、阪谷をフォックスウェルに紹介するものです。実際、彼は 1908 年 4 月 15 日に外遊に出発し、アメリカを経由しリヴァプールからロンドンへ行き、そこでアスキス首相等と会っています。

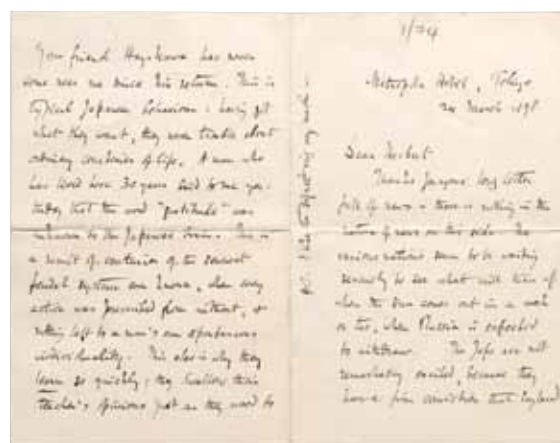
4) アーネスト・フォックスウェルと日本

Letter 12 と Letter 13 はアーネストが兄のフォックスウェルに宛てた書簡です。「フォックスウェル文書」には兄宛の書簡は 360 通に及びますが、この書簡を含めて、家族間の書簡はフォックスウェル家の伝記を書くに際して不可欠な資料となることは間違いないと思います。

すでにお話ししましたように、アーネストは医学を学んだ後、マーシャルや兄のフォックスウェル、さらには菊池大麓や末松謙澄が学んだケンブリッジ大学のセント・ジョーンズ・カレッジに入学し、1874 年に道德学のトライボスに合格しています。卒業試験のことをトライボスと言いますが、当時経済学のトライボスはまだ設置されていませんでした。経済学トライボスは、マーシャルの努力により 1903 年に設置されますが、それまでは道德哲学の中に経済学が含まれていました。アーネストは、1875 年に学士号を取得し、その後、鉄道研究の権威になりました。

お雇い外国人教師として来日したアーネストは、帝国大学-のちに東京帝国大学-で 1896 年 4 月から 99 年 7 月まで、経済学と財政学を担当し、築地にあったホテル・メトロポールで生活しています。明治政府はお雇い外国人を大学で雇う場合、いわゆる非常勤講師として雇用していました。1 年契約の 2 回更新で 3 年が原則です。助教授・教授と昇進する正規の教員ではなく、非常勤講師に過ぎないのです。この時期、アーネストが親しくしていた人にラフカディオ・ハーンがいます。ハーンが一番惨めな生活をしたのがこの帝国大学時代ですが、そのハーンと一番親しかったのがアーネストでした。

Letter 12 は、来日直後の日本や帝国大学の学生の状況を説明するだけでなく、日露戦争前のロシアと日本との関係についても言及しているアーネストの書簡です。



Letter 12 : 1898 年 3 月 24 日付 E.Foxwell 書簡

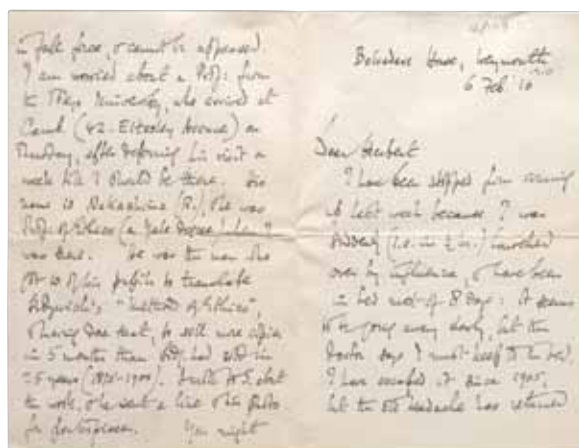
ところでアーネストは高等商業学校で1897年6月から1年間非常勤講師を務めます。その就任に際して作成された、高等商業学校の小山健三校長の帝国大学の総長濱尾新宛書類が残されています。さらに、その資料群—東京大学附属総合図書館所蔵のマイクロフィルム—の中には横浜の外国人の医者が書いたアーネストの診断書も残されています。

最後に、Letter 13を紹介したいと思います。この書簡は学術的な意味でも重要な書簡です。

アーネストはヘンリー・シジウィックの *Methods of Ethics* の邦訳・出版(1898)に際して、シジウィックと著作権処理だけでなく、原著者序文、さらにはシジウィックの写真を送るよう要請するなど、さまざまな労をとりました。この翻訳の「閲」はアーネストの同僚である帝国大学倫理学・哲学教授中島力造で、翻訳者は、その学生である山邊知春と太田秀穂ら10名です。この書簡はこれを裏付けるものであり、原著が25年間で売れた以上の部数が邦訳では5ヶ月間で売れると書き、また、当時ケンブリッジに滞在していた中島は亡きシジウィックの夫人に会うべきだと書いています。ご承知のように中島は、功利主義思想が優位を占めていた当時であって、トーマス・グリーンの新理想主義的な倫理学を日本に紹介したことで有名です。この書簡のように、「フォックスウェル文書」に含まれるアーネストの書簡をすべて調べると、日英の学術交流を支える

アーネストの姿を明らかにできるのではないかと期待しています。

今日は、「フォックスウェル文書」に含まれている13通の日本人のフォックスウェル宛書簡の紹介をさせていただいたに過ぎません。従いまして、多くの有用な情報を提供する書簡約24,000通を有する「フォックスウェル文書」をぜひ利用していただきたいと思っております。購入したのは関西学院ですが、これら資料を利用していただくのは日本だけではなく世界中の研究者の皆さんです。現在、関西学院大学図書館では、これら資料の公開に向けての諸作業をしております。資料整備が出来た際には、ぜひ、この世界的な原資料をご利用いただければと願っています。



Letter 13: 1910年2月6日付 E. Foxwell 書簡

井上 琢智 (いのうえ たくとし)

関西学院大学経済学部教授。前学長。

専攻は近代経済思想史で、今は特に近代経済学と日本の近代化、経済学の制度化の問題を扱っている。

主な著書に、『黎明期日本の経済思想—イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化—』（日本評論社、2006）、『ジェヴォンズの思想と経済学—科学者から経済学者へ—』（日本評論社、1987）、主な編著に *J. S. Mill's Journal and Notebooks of a Year in France, May 1820-July 1821* (Edition Synapse & Routledge, 2014)、*Economics in Meiji Japan, Collected Works of Western Origin, Part I ~ III* (Pickering & Chatto, 2009-2012)、『幕末・明治初期邦訳経済学書』全7巻（ユリカ・プレス、2006）、*W. Stanley Jevons: Collected Reviews and Obituaries*, 2 vols. (Thoemmes Press, 2002) などがある。

(著者の職名は2014年度のもの)